

佑啓

い け う ゆ

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

共に来た道、続く道

行場 貴子

「皆さん、どうぞ良い週末を過ごして下さい。一週間お疲れさまでした」毎週金曜日の終礼当番の挨拶で一週間が締めくくられます。ここ最近「あれ、つい二、三日前に聞いたように感じるが、もう一週間経ったか」と月日が経つ速さに驚くことが多くなってきました。そのような私に、大塚・小石川福祉作業所の運営開始から二十年経つ感想をお願いしますと、広報委員から原稿依頼があり、まさに「えええ」という感じでした。二十年という月日の重さを語るには、心許ないですが、自分自身への振り返りとして綴ってみました。



平成十八年四月からの運営に先立って、一月から三月までの三ヶ月間、並行運営の機会をいただきました。大塚・小石川それぞれ二名ずつ四名の佑啓会職員が文京区の職員と一緒に働きながら、利用

者に関することはもとより作業所の歴史や受注作業について、業者さんや区内施設、地域町会への挨拶、フォークリフトや折り機など備品機器の使い方などなど、細部にわたってご指導をいただきました。並行運営の初日は、利用者との新年会及び成人者のお祝い会でした。少し緊張した新成人三名を囲みながらのお祝い会は、職員余興の小品やハンドベル演奏など手作り感あふれるとてもアットホームで、温かな雰囲気だったことを思い出します。翌日からは日課に沿って利用者と一緒に過ごしながら受注作業を中心に進め方などのレクチャーを受けました。利用者が降所した後は、利用者一人ひとりについて各担当者から詳細な説明を伺い、ある程度の人物像を把握することが出来ました。また、折り機など受注作業に欠かせない機器の取り扱い方なども懇切丁寧に教えていただきました。飲み込みが悪く不器用な私は、本のカバー折りに毎日四苦八苦したことを昨日のここのように覚えています。最大行事のひとつである「一歩いっぽ祭り」も例年の秋ではなく二月に設定していただき、お祭り担

当の保護者との打合せにも参加し、実際に体験することで、お祭りの雰囲気も知ることが出来ました。このように、区の職員の微に入り細に入りの引き継ぎをはじめ、保護者の皆様の温かい受け入れのおかげで並行運営の三ヶ月は無我夢中で瞬く間に過ぎていきました。そして、四月。佑啓会での運営がスタートしました。当初利用者は男性十八名、女性十六名の合計三十四名で、職員は総合職六名、専門員四名、看護師一名の構成でした。しばらくは利用者が混乱なくスムーズに受け入れてもらえることを第一に考えました。支援、日課や業務の組み立ても、急な変化での戸惑いを避ける観点から区の職員からの引き継ぎを踏襲しながら進めました。



また、保護者には、佑啓会のことを先ずは知っていただきたいと思ひ、「百聞は一見にしかず」佑啓会の見学会を計画したところ、保護者の賛同も得られ、旅行も兼ねて一泊研修会を実施しました。寮内や作業棟を見てまわり、ゲストハウスの見学では、「私も一緒に（利用者として）入居したい」と嬉しい感想も聞かれました。丁度し

ぜん工房では利用者、家族や行政の方を対象の研修会・交流会が開催されており、そちらへも合流してもらいました。和気あいあいと過ごすことで佑啓会の理解を深めていただけたように感じました。日々の活動の他、旅行やお祭り・運動会など、様々な行事を通して利用者と共に過ごした日々は、何ものにも代え難いものです。楽しいこと、嬉しいことが大半ですが、どういう訳か私の心に深く刻まれていることは、つらく悲しい出来事のようなのです。

小グループで出かけた観劇会の帰り、一人の利用者を地下鉄駅構内で見失い、悶々として過ごした丸一昼夜。そして、無事に保護された瞬間の言葉では言い表すことの出来ない気持ちは忘れられません。今でも、外出や旅行の際にはこのことを教訓として臨んでいきます。そして、その四日後に起きた東日本大震災、コロナウイルス、ノロウイルスの蔓延などが去来します。

東日本大震災は、午後の休憩時間のことでした。利用者はゆつたりとくつろいでいた際の出来事で、大きな揺れに一緒に驚きましたが、皆さん比較的落ち着いて職員の声掛けに従って机の下に身を隠すなど避難訓練を思い出しながら、迅速な行動をとっていました。丁度小学校の下校時間と重なり、作業所前の道路でうずくまっていた子ども達を作業所内に誘導したことを記憶しています。未曾有の大災害でしたが、利用者・保護者の皆さんが全員無事だったことにただただ安堵いたしました。コロナ禍では感染対策の一環とは言え、閉所や分散通所を余儀な

くされ利用者の皆さんには窮屈な思いをさせてしまいました。ですが、利用者の明るさ、たくましさ、健気さに常に救われ励まされた日々でした。ノロウイルスでは、集団生活においての感染の怖さを改めて痛感させられました。ウイルスという見えない相手に翻弄されましたが、私達人間はもとと見えぬものの、形のないものゝ愛情、絆、信仰などを大切にしてきました。そうした思いをお互いに強く持つて生きることの大切さを、人とのつながりが希薄になつてきている現代、改めて教えられました。

福祉制度の見直しや改正、事業内容の変更、作業所の大規模改修などの大きなうねりもありましたが、その都度障害福祉課、保護者の皆様のご支援、ご協力を得ながら進めることができ、利用者への大きな影響、支障が及ぶことはほとんどなかったように思います。



こうして年月を重ね、二十年。現在の在籍者は三十七名で、そのうち当初から共に過ごしてきた方は十一名です。高齢化の波が押し寄せてきていることは否めません

が皆さん明るく元気に通所しています。残念ながら在籍中に悲しいお別れとなった方々には面影を思い浮かべながら御命日には心の中で手を合わせています。こうして、利用者の皆さん、働く仲間をはじめ沢山の出会いと別れを繰り返して今日に至っています。

以前勤務していた施設でのこと、職員会議で「利用者の高齢化に伴いカレイ者棟を新設することになりました」と話がありました。まだ二、三年目の私は「カレイ」の文字がパツとうかばず高齢に結びつく言葉として「過齡」と思い込んでいました。ある時、先輩職員から「行場さん、年は単に過ぎていくものではなく、月日を加えていくものです」と言われ、「カレイ」は加齡だと知りました。

私が新人の頃、半年も一年もかかってやっと覚えたことを今の若い人達は、半月、ひと月足らずで難なく覚え、パソコン、スマホなどを駆使して、業務をこなしています。本当にすごいなと思います。『老いては子に従え』頼もしい人達に背中を押してもらいながらこれからかけがえのない大切な人達と、丁寧に月日を重ねてまいりたいと思います。

月曜日の朝礼、「新しい一週間が始まりました。今週もどうぞよろしく願いいたします」

（ふる里学舎小石川 施設長）

キッズガーデンとの出会い

大竹 敏恵

コロナ禍での出産・子育てということで、親子教室・子育て支援施設などの利用が難しく同世代の子供とのふれ合いも少なく、息子の発達の遅さにさほど気にもとめていませんでした。私自身育休を取っていたこともあり、保育園への通園を希望していましたが、なかなか受からず、所属していない子能通过る一時預かりの子に比べて遅いなあ、興味のないことに対して椅子に座っていられないなあ、と気になりはじめました。周りからは男の子だからね、ゆっくりなんだよ、という言葉に安心して成長すれば落ち着き、言葉も出てくるとそう思っていました。

四月からは年少になるので、同世代の子供たちとのふれ合い・集団生活を経験させたく幼稚園も検討し、いざ面接になると椅子に座っていられず、泣き叫び走り回ってしまう息子。他のお友達は挨拶ができ、名前が言え、椅子に座っていられるので、驚愕しました。もちろん入園することとはできませんでした。



市原市の児童発達支援センターに相談し、テストを受け、認知・適応・言語・社会性が実年齢よりも一歳六カ月遅れている発達障害と知ったのが今年の一月末でした。それから、障害のある子能通过る施設を探しましたが、見つからず、悩み不安に押し潰されそうなとき、ふる里学

舎五井キッズガーデンに出会いました。説明会当日、場所見知り人見知りするのではないかと、幼稚園の面接時の光景が脳裏に浮かびました。しかし、嫌がらず先生やお友達と楽しく遊ぶ様子を見て、たいへん驚きました。子供の本能が「ここは大丈夫！安心できる場所」と認識したのだと思います。こちらでお世話になりたい。面接をお願いし、受け入れてくださったことにとても感謝しております。



いよいよ四月。希望と緊張の入園、季節ごとの制作活動、プールに夏祭り、遠足、運動会、お誕生日会とさまざまな行事を通してお友達もでき、成長していく姿がとても嬉しく、色々な行事に参加できることの幸せを感じております。また、話す言葉も増え、少しずつですが言葉のキャッチボールもできるようになり、先生・お友達の名前を言えるようにもなりました。ご飯の時、フラーっと立ち上がりどこかに行ってしまう息子が、椅子に座っていられるようにもなりました。同時に、自我も強くなり気に入らないと癪癪を起こし、のけ反ったり、走ってどこかに行ってしまう息子を先生方は優しく見守り、気持ちを汲んで色々な選択肢を与え、納得するまで寄り添ってくれ感謝の念に堪えません。そして、朝起きると必ず、「先生、行く？」と聞いてきます。お迎えが早いときは、なかなか帰ろうとしません。なので、土曜日の日中一時預かりをお願いし、なおかつ平日はバスも利用させていただき、連絡帳アプリを通してその日の様子を写真付きで送っていたので、安心してお任せすることができます。

キッズガーデンに通い始めてから

あつという間に七カ月が過ぎました。お友達と一緒に充実した日々を過ごせる環境を整えていただき、たくさん愛情を注いでくださる素晴らしい先生方に恵まれ、キッズガーデンとの出会いは私たち家族にとって、かけがえのない宝物になりました。これからも、子供たちとともに学び、笑い、楽しく、のびのびと成長していきたいと思えます。温かいご指導、よろしくお願いいたします。

(ふる里学舎五井キッズガーデン 保護者)

○●●●●●●●●●●●●●●●●

少年野球チーム

「青葉台ユークーズ」



佑啓会が地域貢献の一環として立ち上げた少年野球チーム「青葉台ユークーズ」は、令和六年六月の開設から約一年半が経過し、現在三十二名の子供たちが元気に活動しています。

チーム最大の特徴は、保護者の負担がなく、野球をやりたい子供たちが野球に専念できる環境を目指している点です。指導は「ふる里学舎野球部」のメンバーが全面的に担当し、毎週青葉台小学校のグラウンドやふる里学舎杜のホール(体育館)で白球を追いかけます。



チームスローガンは「配気配心(気を配り、心を配れ)」。

これは、野球の技術だけでなく、仲間への思いやりや周囲への感謝の気持ちを養い、社会性を身につけ遅く育ってほしいという願いを込めたものです。

まだ公式戦では一勝もできていませんが、子供たちは初勝利を夢見て、一生懸命練習に励んでいます。子供たちが野球を通じた様々な体験から大きな感動を得て、無限の可能性へ繋がっていくことを期待しています。

これは、まさに法人の理念である「体験と感動が可能性を育む」を体現する活動の一つだと考えています。今後も、地域に根差した活動として、子供たちと一緒に全力で楽しんでいきたいと思えます。

ご声援、宜しくお願い致します。

ユークーズ公式 Instagram



○●●●●●●●●●●●●●●●●

ユークーズと蒼太の一年

岡 陽平

息子の蒼太がユークーズに入部して、早くも一年が経ちました。令和六年九月に体験入部を経て、十月に正式に入部。以前、年少・年中は幼稚園のサッカークラブに所属していました。サッカーを辞めた理由は、「走ってばかりで嫌だった」とのこと。親としては、サッカーでは自分の思うようにボールを扱えず、上手な子が優位に立つ場面が多かった印象です。ボールを奪い合うことが苦手だったようですが、野球では自分の思い通りにバットを振り、ボールを飛ばせることに喜びを感じていました。

ユークーズに入ったきっかけは、

知り合いに誘われて体験会に参加し、「楽しかったから入りたい」と、息子が言ったこと。知り合いの子が多かったことも大きな理由です。親としては、練習場所が自宅から歩いて行ける距離にあり、月謝や父母会などのお手伝いが不要な点も魅力でした。入会時には帽子と練習着のプレゼントもあり、逆に、「月謝を払っていないのに良いの？」と不安になるほどでした。

入部後、息子は野球に行くのが楽しくて仕方ない様子で、「嫌だから行きたくない」と言ったことは一度もありません。

初めて参加した友遊ボール大会では結果が振るいませんでしたが、今年十一月の大会ではBチームのメンバーは次々とヒットを打ち、守備でもファーストアウトを何度も決めました。Aチームのメンバーも全員で声を合わせて応援し、みんなの力で初めての勝利をつかみ取ることができ、とても感動しました。子供たちは野球のルールも理解し、守備体系についてチーム内で意見を出し合う姿も見られ、今後は軟式野球での初勝利に向けて頑張ってほしいです。

軟式ボールの練習を始めた頃は、グローブでキャッチすることもできず、キャッチボールが出来る子も数名程度でしたが、今ではAチームはもちろん、Bチームも粗い感じではあるもののキャッチボールができるようになりました。これも練習の成果であり、コーチや監督の指導がしっかりしている証です。

息子は試合形式の練習で速いボールを止めたりアウトを取ったとき、誰よりも嬉しそうに喜びます。コーチに褒められると、その喜びが自信となり、練習後も、「もつとキャッチボールしよう」と積極的に声をかけてきます。その笑顔に癒されています。私は学生時代から社会人までサッカーしか経験がなく、野球は未経験です。簡単な知識やルールは分かりませんが、深い知識がなく、SNSでは様々な教え方があり、どれが正解か迷うことも多いので、なるべく一緒に練習に参加し、コーチや監督の教えを見ながら家でも息子に伝

えています。息子も頑張っています。が、私もルールを覚えながら楽しんでいます。



ユークーズの母体がふる里学舎であることで、今年の夏は納涼祭や夕涼み会にお招きいただき、子供たちだけでなく保護者同士も楽しく交流が持てました。練習試合や大会の移動でもマイクロスバスを出していただけるのは嬉しい点です。子供たちの交流が増え、会場での駐車スペースの問題も解決できるのが最良です。今後、低学年生が高学年になるにつれて、伝統あるチームに勝てるようになれば良いですが、勝てるチーム作りをするのか、野球を楽しむチーム作りをするのかは監督やコーチ陣に委ねたいと思います。強くなることで入部希望者が増え、活気あるチームになることを夢見しています。

(ユークーズ 保護者)

編集後記

つい先日まで「暑い」と言っていたのが嘘のように、気が付けば寒風身に染みる年の瀬を迎えています。今年も佑啓会は様々な活動をとおり、利用者・職員の笑顔に包まれる一年となりました。来年も良い年になることを願って、佑啓一三四号をお届けします。今年も一年お世話になりました。良いお年をお迎えください。

(支援員 栗川克明)